



まさか、映画が我が家で

見られる時代がくるなんて。



画家 小野寺 純一

暮らしに便利で必要だからと持たされたスマホ、超高速生活文明時代にとり残された団塊世代の私などは、インターネットに手を焼きながらも、なんとか日々をこなしているこのごろです。が、そのおかげでうれしいことがひとつできました。それは、なんと映画を自宅で見られるホームシアターができました。なにしろ映画は私らの時代の娯楽の王様で、最盛期には立ち見はあたり前、入れ替えなしの三本立、タバコの煙のひどく悪い空気とトイレの臭いで、必ず頭が痛くなったものですが、それでも映画は楽しかったんです。それが我が家に、この上ない極上のぜいたく「ぜいたくはステキ」などによろこんでおります。ヨロコビのあまり長くなりました。ホームシアターの柿落としに選んだ1本は、私の最も敬愛するチャーリー・チャップリンの「モダン・タイムス」であります。1936年封切りですから今から約84年前のサイレント映画でしたが、トーキーの黎明期とあって、一部音楽が入り、チャップリン自身の歌声がはじめて聞くことができる記念碑的な作品でもあります。粗筋は、あるオートメーションの部品工場で、作業現場はすべてテレビで管理され、作業機械の一部と化したチャーリーは、精神が侵され、病院に入れられます。やがて退院し街をブラついていたら、トラックが旗を落とし、ふりながら追いかけているところにデモ隊がうしろからやってきて、そのリーダーにまちがえられ、牢獄にとらわれたりします。そんなある日、りんごを盗もうとした少女とであい、めんどろを見ながら職探し。勤めた造船所では進水直前の立派な船を台無しにしたり、デパートの夜警のしごとでは、少女をよろこばせようと自慢のローラースケートを目かくししてやるという、ハラハラドキドキ、このあたりもう天才というしかないですね。デパートをクビになった少女とチャーリーは舞台付レストランに雇われます。そこで経営者から歌うことを命じられたチャーリーは苦心しながら練習するんですが、おぼえられない。そこで少女は袖のカラーに歌詞を書きます。びっくりしたのは上着を脱いだら見えるところだけのシャツと、腕のと

ころがないカラーだけというシーンに笑えます。自信をつけたチャーリーは、はりきりすぎでカラーをどこかにとぼしてしまいます。さあ困ったチャーリー、うしろで演奏するバンドに合わせ即興でデタラメの歌でごまかします。これが大当たり、客は大よろこび会場は爆笑のうず、「ティティナ」という曲で、はじめてチャーリーの声が聞けたんですね。しかしその時、少女を鑑別所に入れようとする役人が現われ、二人はレストランを逃げ出します。さっぱりいいことなんてないと悲しむ少女に、チャーリーは「生きていれば、必ず良いことがあるよ元気を出して「スマイル」 さあ笑ってごらん」とニコリしながら励ますのです。このシーンが泣けますね。

応える少女の表情、心が通じあった二人は、夜明けの明るい道をならんで歩いて行くのでした。ここでエンドマークで本編終了。ほのぼのとした余韻の残る名画のひとつコマ。もう1本は「ライム・ライト」この映画の中で、老いたチャーリーは失意の踊り子に「人は、愛と勇気と、ほんの少しのお金があれば、誰でも幸せになれるんだよ」

とはげます言葉が胸をうちます。チャーリー・チャップリンは、いつの時代のどんな人にも等しく、あたたかなメッセージを届けてくれます。昔テレビの「金曜ロードショー」という番組で解説をしていた水野晴郎さんが「いやあ、映画ってほんとにいいですね」と語りかけていたことを思い出しました。名作を自分の家で見ることのできる至福のひとつとき、私は本当にしあわせものです。



(絵：小野寺純一さん)